
アスガルド - 紅蓮の流星 - Vol.01

はるまりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アスガルド - 紅蓮の流星 - Vol.01

【Nコード】

N6270M

【作者名】

はるまりん

【あらすじ】

ここはマイソシア大陸に存在する大都市ルアス。その一角に存在するギルドが一つ……。そのギルドの名は「紅蓮の流星」。どんな小さな悩みごとでもたちまち解決という集団の集まり……。だが、それは建前であり実際はとくにこれといった依頼もなくただ一日一日を談笑で終わる、あってもなくてもどうでもいい集団。

基本は雑談による9割ギャグ、そしてごく稀に1割真面目という奇妙に絶妙なアンバランスな作品です。

本作は、ネクソンの最長寿MMORPG「アスガルド」を題材に描かれたファンタジーギャグコメディ作品です。

Act・01：ナインインチネイル

このお話はアスガルドです。とあるギルドのお話です。少数のギルドであり、ぶつちやけギルドとして成立しているのかよくわかりませんが（笑）。しかしながら、ギルドです。ギルド名は……「落ちぶれない」。

「え?!今の前フリなの?!ってか嫌だよ!そんなギルド!」

モノローグに対してツツコミを入れているのは本作の主人公、いや、役に立たない主人公「レオナルド・ルイーナス」。貴族っぽい名前だが、貴族じゃない（爆）。あ、本当のギルド名は「紅蓮の流星」ね。

「ちょ?!ヒドくね?その言い方!!てか、そのギルド名カッコイイ!!」

通称「レオン」。ぶつちやけこれもどうでもいいんですけどね。

「だ、だからさ……」

地味な主人公路線なので見た目的にも格好いい戦士や騎士と違い、また……己の肉体のみで戦闘を追及していく修道士、二刀流の華麗なる武器捌きが得意な阿修羅でもなく……、地味に爆弾を使い、地味にダガーでちょいちょい突いていく盗賊である（盗賊の皆さん、ごめんなさい）。

「だから言い方がヒドいつての!盗賊の人に謝るなら最初からそんなモノローグ入れるな!俺泣いちゃうよ!!?いいの?!」
いいよ。

「うわーん、バーカ!」

「さつきからうるさいのよ!アンタはあ!!」

そしてレオンの頭を力任せにぶん殴っているのはこのお話のヒロインの「アリア・シアンデーム・ウ・ラ・レアンドール」。名前が

「ー・フランソワ」。エデルアンダー出身の女の子。現在はこの五人でギルドを運営しているわけじゃないんだけど、まあ主要はこの五人だけ。あ、ちなみに何だけどリリーの父はサルトレーンの操縦士。母は……どうなの？

「「考えとけよ！」」

「おつかーなー、おつかーなっからだんべえだかん」

「なっからだんべえ？……ああ、すごいね。でもどうすごいのか？」

「おつかー、この前ブロニンをどこかにぶん投げたんだぞ」

「ぶん……って、うえええ？！ぶん投げる？！攻撃じゃなくて？

！てか、あの狂暴なブロニンを！？すごいナリリーのお母さん！」

「んだ、この前連れてってくれたサラセندانジイオン……ダンビ

ヨ……のブロニンを一撃で倒したんだっぺ」

「言えてないぞ！噛んでるから！八歳には難しかったか？サラセندانジイオン！」

「そんなことよりそのブロニンって……」

「ほうほう、そいつあー『ナインインチネイル』じゃないかい？おれっちも倒した事あるんだが、こいつあー一筋ならではいけないぜい？」

メルはそう解説する。ナイス解説。

「イェーイ！」

「お、おお、そのナイ……ネル……ネイルナインインチ？あれめっさつえええだろ？！」

「アンタも噛み噛みじゃない！ってかすごすぎるわよ！あれを一撃つて！どんな規格外なわけ？！」

「リーのおつかーなっからだんべえだっぺ！えっへん！」

「そいつあー、マジなっからだんべえだなあおい！」

メルはカッカッカと笑い始める。しかし、何を思ったかのカレオンは対抗意識を燃やし始めた。

「お、俺だってそんなナイル……ネイチャー……ネイルインチナイル？一捻りなんだぞ！」

「だから噛み噛みだし！！もういいわよ！！ていうか、嘘言わないで！アンタ爆弾設置するぐらいしか能がないヘタレじゃない！知ってるのよ！」

「あ？お前何言ってるの？お、おおおお俺に倒せねーモンスなんていねーよ！」

「嘘つけええええ！アンタの武器力チハブンでしょ！そこらへんに落ちてたやつ鑑定して使ってるだけじゃない！！それにアンタガッタガタ全身震えてるじゃない！」

「はあ？ふ、ふるふるふつふふつふふ震えてねーし！」

レオンとアリアは二人してテーブルをバンバン叩き合いながら言い争い。

「また始まつただがん」

「だな」

「リー知ってるぞ。こづいう二人……」

「ん？」

「そーしそーあいつて言うんだぞ」

「そうだな W」

「リリーいいとこつくねえ。おっちゃんの座布団にいるかい？」

「いらないだがん」

「そんなわけあるかー!!」

二人は否定するも、とことん息ピツタリの二人である。まあ、こういう場合は喧嘩するほど仲が良いという奴です。

「それも違ーう！」

そんなわけで、やってきました。サラセンドンジョン——十五階。

「全く、レオンが変な意地張るからニンニンチネイルを狩りしに来ちゃったじゃない……」

「うるせーな！俺のせいだよ！」

「そーよ！アンタのせいよ！」

「まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあ

が青ざめた。メルもそれに気付く。

「こいつぁー超ーピンチってやつでさぁ」

あ、ナインインチネイルさんでいらっしやいますか？

.....。

うん、当たり。

四人はしばらく顔を見合わせる。レオンは黙ってリリーを抱えた。

「ぎゃあああああああああ！！逃げるオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

「グルゴアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

四人は全力疾走。と、ここでレオンはブリズウイクを発動。自分だけさっさと逃げていく。

「あ！コラ！アンタだけ足早いのずるいわよ！！！」

「うるせー！俺は盗賊だー！！バーカ！バーカ！」

そして、グレイスはテレポーターランダムした。

「ちよつとグレイス！アンタもずるっ！！！」

『ふうー、俺は聖職者だからな』

「ギルチャで叫ぶないでよ！なんかウザイ！そしてずるいわよ！！！」

「それじゃーオレっちも退却だーいっ！」

メルはペロリンと愛らしく舌を出しながらいつの間にか発動していたブラッドアングーに加え、さらに準備が整ったのかバーサーカ

ーレイジ発動。神速の勢いで逃げ出して行ってしまった。

「え?! ちょ……メル!!?」

一人全力疾走するアリア。ああ、鎧が……ガツチャガツチャうるさいし重い。

「く、くぬう……い、あの男共には期待なんてしてなかったけど……メル……、アンタだけは私の親友だって思ってたのに……」

アリアはクルリと反転。素早い身のこなしで装備を整える。

「グガアアアアアアア!!」

大きな声を上げて、自慢の腕を振り上げて攻撃してくるニンインチネイル。

「やってやるわあ!!!!!! 後でみんな覚えておきなさいよ!!!!!! 三人ともおおおおお!!!!!!」

そんな事言いつつ、アリアはニンインチネイルに向かって行った。

数十分後……。

「はあ……はあ……やった、倒した……」

ヘルリクシャを何個使ったかわからない。しかし、倒した! 経験ウマー。しかし、被害もヤバー。

「そう言えば何かドロップしたわね……」

アリアは手に入れたアイテムを確認する。するとニンマリ笑顔になった。

「あは♪ やったブロンズジャベリン! それからこっちは盗賊の99服じゃない!」

思わぬ報酬品にアリアは大喜び。そんな背後から今度は……?

「ちょ?! ねえアリア。その服、俺に見してよ」

今までインビジブルで隠れていたレオンだった。

「嫌!」

「ねー、いーじゃねーかよー! ちよっとくらい! てか俺にくれよー」

「絶対に嫌！アンタさつさと逃げてあまつさえ隠れてたじゃない！これは売りに出すの！」

「いーだろーバカー！俺にくれたっていいだろー！」

「ヤダ！」

「うわー！バーカバーカ！」

レオンは泣きじやくりながらアリアをポカポカ叩いてきた。

「ちょ？！イタ！イタイわよ！やめなさいよ！そもそもアンタまだこれ装備できないじゃない！！」

「いいんだよ！将来それ着るんだから！」

そんな二人は言い争いをしているとギルチャが入ってきた。

『HELP！HELP！！』

「？？？」

『どうした？グレイス』

『いやーねー、死んだ』

『はあ？！何してんだお前！』

『なんか突然ナインインチネイル湧いたwww』

『はっはーそいつぁー傑作だNE！』

あ、そっか。さっき私倒したから次のが別の場所で湧いたんだ。

『自業自得ね……』

『何を言う！こう見えても俺、ヘルだぞ！今死ぬと経験ごつそり持つてかれるんだ！』

『ああーわかるそれ、私も長い事ヘルしてるからねー、その気持ちだよーわかるよ』

なんだかチャットの向こう側で、メルがうんうんと頷いている気がした。

『仕方ねーな。今どこだよ』

『118、98』

『めっちゃ遠いじゃねーか！』

二人はため息をつく、足取りは重いが行くしかなかった。

『……あ』

そしてふとレオンはここで何か思いだした。そっぴや持ってなかった。

『……コマ忘れた』

『使えねえwww』

『うるせー!』

とことん使えない主人公である。

その後、メルと合流し再びナインインチネイルと戦闘。この戦闘でレオンも戦闘不能に陥り、結局またもやアリア、メル、それとリリーの三人でなんともや^{しりぞ}退けた。

『あ、おつー』

『おつー』

『おつつつー』

『おつー……じゃないわよ!この役立たずの男共!!』

アリアは自分の鞆からコマリクを出そうとした。しかし、ない。入ってない。

『どうした?』

『え?あ、うん、昨日ね、使いきっちゃってたみたい』

『何が』

『だからー、そのー……コマリクシヨン?』

『え?コマ??コマリクシヨン?!なんだよコマリクシヨンって!コマリクだろ!?!てかなんで持ってねーんだよ!!!』

レオンのその言葉にカチンときたアリア。

『私だつていつも持つてるとは限らないわよ!それに使い切っちゃったのはアンタのせいじゃない!レオン!!』

『はあ?なんで俺なんだよ!』

『アンタが昨日調子に乗つて一人で先に進み過ぎて勝手にモンスに囲まれて死んだでしょ!5回も!しかも火山で!』

『ぶwダサwww』

『ち、ちげーよ!俺は恐れを知らないからな!あれはそう、油断したんだ!』

「背面からデスチャンプスミルにクリティカル貰われて一撃で死んだだけじゃない」

『天下のあほだな……と、それよりどうする?』

「あ、そうそう……」

『どうするって?』

『ここは帰還しないだろう?』

『チ!仕方ねーな……』

そう言う二人は帰還することにした。

『覚えとけよアリア!まだ、俺は負けてねーからな』

ズタボロの敗北なんだけどねwww。

「全く……役に立たない二人なんだから……」

「うん、役立たずだ」

「帰ろっか?リリー」

「おう、帰ろっ。リーもうおねむだ」

こうしてギルド「紅蓮の流星」のナインインチネイル狩りはグダグダに終わった。

『何も帰還しなくても良かったのに』

『あんでだよ』

『私、持つてるよ?コマリクシヨン?』

『だから何なんだよ!コマリクシヨンって!!っていつか持ってたのかよ!!!』

「ぶえっくし!!」

レオンは豪快にくしゃみをした。……まあ、それもそのはずである。

「なんでアンタ何も装備してないのよ」

「え?何言ってるんだ?これ、俺のデフォルトだぜ?」

「レオっちったら!男らしいぜ!!」

「そっだ!俺はおと……ぶえっくし!!」

「うわ、きたねー」

最初は服とゴーグル装備してたくせにな。

「あれじゃないか？さっき死んだ時に装備落としっぱなしだと思うぞ？」

「あんだよ、お前だつて金回収してないだろ？！」

「何を言ってるんだ？俺はとつくのとうに自分の金ぐらい回収済みだぞ？」

「うそん」

「なんだ？レオン。お前持っていないのか？記憶の書」

「ふ、あるわけねーだろ！男は黙って徒歩だ！」

そんな事を格好つけながら言うも、……裸だし説得力ないというか……自分は貧乏ですと言わんばかりの発言だった。その後結局、アリアが記憶の書を使ってレオンの装備を回収しに行く事になったのは言うまでもない。

Act・02：ゲートスクロール

レオンはこの日、一人で狩りをしていた。場所はディグバンカー地下29階。

「おっと？……もうヘルシャねーじゃん。ま、そろそろゴミも溜まってきたし、切り上げるか」

レオンはガサゴソとカバンの中を探る。

「んだよ！ゴミいっぱいじゃねーか！」

レオンはカバンの中を開け放つと出てくる出てくる。ライド、炎の拳、ライド、アースシャッフル、ライド、ライド、めった刺し、ライド、ライド、ライド、ライドetc……。

「ライド多いなあおい！」

さて、とりあえず出してみたが……。うーん……。これはどうなんだ……。気のせいかな？……。いや、間違いない！コレは……。コレは……

……！

「……ゲートがねえ」

レオンは取りい出したライドとかライドとかライドをしまつ。

「だからもうライドうつせーよっ！……」

レオンはブツブツ言いながらライドとかライドとかラリー……。

「だからうつせーっのー！！」

まあ、キレんなよ。

「お前がキレさせたんだろ！……… ったく……… それよりもここをどう脱出するかだな………」

そうして考えていると……。

「ん痛っ！」

突如としてなんかカタツムリの殻が飛んできた。スパティだ。あのデブでちょいセレブっぽいなんかイラつくカタツマリ。

「痛てーなコラッ！」

レオンはサンドボムでスパティを撃退すると再び考え込むが……。
「ちょ……！？」

なんか闘気が飛んできた。……さらに、

「アイタッ！」

今度は槍だ。スネイルジャベリン。

「だあー、もううつぜーんだよー！」

ハディムバとスネイルもサンドボムで撃退する。

「たくよ……、次から次へとよ……」

キラリン

「あん？今度は誰だよ！」

レオンは鋭い視線に気付き、振り返ると……やっべー、俺すんごいの見つけちゃった。

スキル・魔法ウィンドウからセルフヒールをドラッグ！ショートカットセットスタンバイOK！いつでもいいぜ！やってやる！

ゴファアッ！！

キタキタキタキター！！必殺のティラノブレス！略してT・B！！

「うおおおおおおおおおおおおセルヒセルヒセルヒ
イイイイイイイ！！」

超叫びながらレオンは何とか逃げ切った。

「はあ……ふっ……うんっ……はあ……ゲホッ……ヒュッ……エホッ」

なんとかディグバンカー28階まで逃げ切った。だが、

ヤ……ヤバイ……。今のでMP切れちゃった。

「どーするどーする！MPねーし！セルヒ連打すぎた！どーする！どーする！」

考える！考えるんだ！

「ん痛っ！」

またもやカタツムリの殻が……スパティ……。

「こんなんじゃ俺死なねーよ？俺をバカにすんじゃないよー！」

スパティを再び撃退すると、そういえばとレオンはカバンの中から記憶の書と記憶の石を取り出したのである。そう、これはあまりにもレオンを不憫に思ったのかアリアが露店で購入してくれた記憶の書（記憶の石付き）なのであった。

「やっぱあったぜ！記憶の書と石！こいつがあれば助かる！とにかく安全な場所に移動だ！」

レオンはディグバンカーからなんとか脱出。
ザザー……ン。ザザー……ン。

レオンはどうやら南国のビーチのような場所へ移動した。
「よっしゃ！モンスイねー！ここなら！」

……………。

……………。

……………。

……………。

「……おかしいな」

レオンの体力は自然回復で全快。MPも同様だ。しかしなんだ、この違和感。しばらく辺りを探索。するともしかして……と嫌な予感がよぎる。

「はは、おいおいまさか……マジで？」

そう、ここはルケシオンダンジョンと海賊要塞を結ぶ中継地点のマップであった。

「ここから徒歩で帰ってか？」

もしここで帰ったとする。相手はなんのこっちゃない。ドロイカンナイトとドロイカンマジシャン。それからまあ、雑魚も何種類かいるが。

「入った途端、真っ暗で燃えて、毒に侵されて混乱じゃね？」

念のため、カバンを調べた。しかし、ないんだよな。精神安定剤。……せめてそいつさえあればいいんだけどよー……。

「やばいな……石もさっきので使い果たしちゃったし……」
再びシンキングタイム。どーする、どーする。

「インビジ効いたっけ？」

効いたような……効かなかったような……。一か八か。

「賭けるしかねえ……ここで負けたら、……俺は死ぬ！」

レオンはポータル前までやって来て深呼吸。そして、腹を据えた。
「やってやる！」

レオンはインビジブルを発動。そして、一秒でも早く安息の地へ赴くため、ブリズウイクも発動。セルフヒールスタンバイ！

「うおおおおおおおおおおー！！！」

レオンは走った！がむしゃらに！とにかく死に物狂いに！そしてルケシオンダンジョンの最初の難関を突破した。

やった！俺やったよ！泣かなかった！偉い！

と、ここでインビジブルしゅーりよー。

ギロリン。

「はい？」

一斉に睨まれるレオン。

「え？」

一瞬時間が止まった。そう、彼は最初のルケシオンダンジョン5階層目を突破したに過ぎず、まだ4階層分残っているのだ。そしてここには5階層目よりはエネミーレベルは低いが使ってくる状態異常スペルを使ってくるのが同じモンスター、ドロイカンナイトやドロイカンマジシャンはいる。ただし、こちらはアンデットじゃないだけ。

「はいく？！……！」

レオンはここで集中砲火。

「アツツ！熱い！毒が！毒が！暗い！暗いようわー！あへふほむん
まてるじ！？」

状態異常が揃い踏みになり、レオンは敗北した。ギルチャですぐ
さまレオンはグレイスに連絡。

「お前天下極まりのないアホだなｗｗｗｗ」

「あんだと！！」

「まあ、あれだ。あれでいいだろ？」

「なんだよ、あれって」

「リバイブｗｗｗｗ」

「死ねよバカ！！」

以上、レオンのグダグダな狩りの話でした。狩りへ行く時は計
画的に。

Act・03：エンチャント・クライシス

レオンはエンチャントに成功しました。エンチャント内容を確認してください。

「ウイヤツホーウ!!!」

レオンはアジトで一人大喜びしていた。

「な、なに?!いきなりどうしたのよ!」

「何?とうとう壊れちゃったのかい?うちのギルマスは」

アリアとメルが驚いている最中、レオンはアリアの両肩を掴み、ガクガク揺らした。

「アリア!俺やったよ!やってやったよ!うお!んっ!!」

「……と、とりあえず離れなさい!このバカ!!」

アリアは顔を染めて思つくそグーパンチでレオンを殴り飛ばした。

「おおー、これが世に言う『鉄拳制裁』すか!？」

「……………」

「まったく、何なのよいきなり……大声を出したかと思えば、人の肩掴みかかって揺するなんて……」

レオンの頬は痛々しい殴られた跡が残っていた。

「だ、だってよおーこれ見ておくれよ!……」

レオンはそう言っただけで差し出したのはブリズリングだった。アリアは黙ってそれを手にとって調べた。つーか右クリック?

「……STR3、DEX3、AC4、EnchantLv5付与……」

?!

「え?!ちょ!これすごっ!マジで?!」

「おっほ！こいつぁ神、後輪？！あ、いつけね、漢字間違えちった。降臨だね」

「お、おおふ……」

「いいなー、これ。ほしいなー」

「アリアはレオンがエンチャントしたブリズリングをさも欲しそうな目線で欲しそうにいう。

「やんねーよ？！ぜってーやんねーよ！？何言っちゃってんだお前！ー！アホだろ！」

そう言つとレオンはアリアからブリズリングを取り返す。

「じゃあ、こいつはおれっちのだNE！」

「だからなんでだよ！さっきもぜってーやんねーつつたる！！」

「ちえー」

「それよりそれ、どうするつもりなの？」

「……え？」

レオンは早速F2掲示板に書き込みを開始しようとしていた。

「ちょ！そこで売りに出すの？！ここでエンチャしないの？！それでもアンタ男？！」

「軟弱者は嫌われるぜ？ほらほら、彼女からのお株も大暴落だ！」

「う、うるせーよ！俺のブリズだ！俺がどうしようと俺の勝手だろ

！！」

ギヤーギヤー騒ぐ三人。そこへグレイスが帰ってきた。

「ふうーただいまー」

「んお？おー」

「あ、おかえりー」

「おっかーりー」

「……………」

グレイスは二人の今現在の光景を目の当たりにし、一言告げた。

「……なんだ、そういうことは夜になるまで待てよwwww」

「ん？ああ、絵的にアリアがレオンを迫って、押し倒してるね！これはwwww」

「ばっ！違うわよ！何言ってるの？！わ、わわわたしがこんなアホな奴どーってことないわよ！ただの虫じゃない！」

「え？虫？！俺、虫なの？！」

とまあ、グレイスにかくしかじかというわけを話しました。

「……………」

「……………わかつてくれたか？」

「……………」

「……………ふむ」

グレイスは一呼吸おいて切り出した。

「かくかくしかじかじゃわからん」

「右に同じ！」

「空気読めよグレイス！！ってかメルは俺達とずっと一緒にいたろ
！！」

つまり、あー、めんどくせーな。レオンがブリズリングエンチャしたっつー話だよ。

「わかってる。最初から読み返した」

「え？読み返した？」

「こつちの話だ。それよりレオン、今のレオンには二つの選択肢がある」

このまま何もせずに売りに出す。もしくはさらにエンチャントし、ブリズリングの能力を底上げするか。

「決まってんだろ！売りに出す！」

……………はあ。

「……………ヘタレすぎよ」

「ヘーターレ、ヘーターレ」

「なんだと！お前、この付与のリングもつかい作れっつてのか？！狙って作れるわけねーだろ！これが出来た時点で俺すげーんだよ！高望みしたらバカみるに決まってんだよ！」

まあ、レオンの説得力もしくりなんです、ここはエンチャしよーぜ？

「ああ、いつでもいいぞ」

アリアはちよいちよいとグレイスとメルの裾をつついて、ヒソヒソと話し始めた。

（ねえ、いいの？そのプロテクターって受け渡しできないんじゃないの？）

（ああ、あえてエンチャさせたいという作者の意向に沿っただけじゃないと面白くないからな）

（……アンタも悪よのう）

（なんとでも言え……っっていうかレオン、プロテクター使ってない事にすら気付いてないぞ）

（アイツはバカね）

「俺、いきまーす！……！！！」

レオンはエンチャントを行いました。

ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！

「どうだ……？」

レオンはエンチャントに成功しました。

「イヤッ……！！！！！」

レオン達三人は喜び合った。しかし、メルは待ったをかける。

「まだそれは早いんじゃないかい？」

「え？」

「エンチャ結果見るよwww」

「……あ、うん……」

レオンはブリズリングを手取る。またもや緊張する。

ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！

「もういいから！それ！」

「……どうわつつちゃ……！……はいはいはい！キタよ？キタ
キタキタキター……！E L V 6！S T R 3 D E X 6 A C 4付与！
！」

沈黙の瞬間だった。しかしレオンは勝利した。レオンは仲間の方
へと振り向くと、アリアとグレイス、メルは駆け寄った。

わああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ……！！！！！！！！

そんな歓声すら聞こえている気がした。

「やった！俺やったよ……！俺すげー……！」

「うんうん！やったね！」

「見事なエンチャだった……感動した」

「いやーなんというかもう最高だよアンタ……！」

と、四人で喜んでいるとレオンはさらなる興奮を呼び起こす事にな
った。

「な、なあ……お、俺……もっかいエンチャするしかなくね？」

アリアとグレイスは顔を見合わせる。

「やるべきね！古びた技量ならたくさんあるわよ！」

「アタイもいっぱいあるでよ……！」

「レオンならきつとできる」

「おおふ……みんな……だーい好きだ……！！……！」

とまあ、大げさすぎる話はここまででいいよね。

レオンは再びエンチャントした。

成功。D E X 2付与しました。

成功。D E X 3付与しました。

成功。DEX3付与しました。

ELV9まできた。ここまでの成果、DEX14、STR3、AC4、ELV9付与。もうこのまま売ってもいいんじゃない？ってところである。

「……………」

レオンの手には古びた技量の巻物がしつかりと握られている。緊張のしすぎでとうとう言葉を失い、汗がダラダラ流れている。

「お、おおお俺！挑戦すべきか？もう充分じゃね？！」
しかしグレイスは首を縦に振らなかった。

「いや、最終段階まであと少しだ。ここでDEX3付与すれば合計DEX19リングが完成するんだぞ？」

「そうかもしれないけど……あれもうやばいでしょ？あの顔……レオン相当疲れきってるじゃない……」

「いや、ここはあえてエンチャすべきだと俺は思う。……一応レオンが主人公だしな」

「……ナニソレ……」

「あーもう！ごちゃごちゃうつせーんだよ！気が散って集中できねーよ！」

レオンはいざエンチャントをしようとした時である。隣の部屋でお昼寝していたリリーが目を覚ましてやってきたのである。

「ふはわぁ……むにゃむにゃ……よく寝ただがん……」

「あ、リリーちゃんおはよ。よく眠ってたわね」

「寝る子は育つ」

「うん、よく寝ただつぺ。……………」

リリーはまだ寝ぼけながら眠い目をこすってレオンの方を見やる。

「レオン、何してるんだつぺ？」

「うん。今エンチャントしてるのよ。ちょうどリーチ」

「リーチだつぺ？」

「ああ、これが成功すれば俺は間違いなく億万長者！セレブだぜ！

セレブ！」

リリーはレオンのその言葉にパツチリ目が覚めた。

「おおー！すごいだかん！レオン億万長者になるのか！？」

「次でE L V 1 0 だぜ！…へへ、俺やってやんよ！成功させてやんよ！」

リリーはその言葉に一気に現実に戻された。

「え……。今、E L V 9 だっぺ？」

「おう！すげーだろ！」

「……リーのおつかーな！言ってたぞ。E L V 1 0 はとてつもなくうまくいかんって」

レオンはそこでピクツと止まった。リリーの言葉にグレイスはさらにレオンを積みかけるようなプレッシャーを与える。っていうかまたリリーの母親が出てきたな。ちよいちよい出てくるなよ。

「ああ……。E L V 1 0 の成功率が1%程度らしい。ほぼ失敗つてとこだな」

「それは私も聞いた事ある！幻のE L V 1 0 だったっけ？」

「うむ」

レオンは完全に停止。手に持っている古びた技量の巻物はそのまま床に落とす。そして、グレイスに泣きながら飛び付いた。

「ねえ！なんでそう言う事言うの！？俺プレッシャーに弱いんだよ？！わかってんだろ！？そう言う事言うなよバカー！！」

アリアはため息をつきながらレオンの落とした巻物を拾い上げ、自分の荷物入れに入れる。

「……なら、成功率上げたらどう？」

「バカかおめーよー！！上げられるはずねえだろ！！一回死んでこい！！」

レオンはそんな泣き事言っていると、アリアはため息をつきながら自分の荷物の中から巻物を一つ取り出す。

「ほら、私持つてるわよ？天」

え？

今なんと？

「そう言うのやめてよ……。だから持つてゐるって言ったの、技量の巻物・天」

マジデ？

マジデ。

「うおおいおいおいおいアリアあああああああ！！」
「きゃあああああああああ！こつちこないでよバカ！！！！」
バキッ！！！！

再び鉄拳が唸りを上げた。

「はい頂きましたー！鉄拳制裁パート2！！」

さて、気を取り直して。

「じゃあ、改めていくぞ……」

緊張の空気が張り詰める。そんな様子を見ながらグレイスがちょいちよいと肘でアリアをつついた。

（なによ……）

（技量・天、あれ高いだろう……？）

（え？まあ、そうね。でも、ギルメンだしいいじゃない）

（だとしても本来は通常の相場より安くすると言うのが普通だろう？）

（……アイツからお金とつてもねえ……拾ったカチハブン使ってるぐらいだし……たまにまともに薬代だつてない時もあるのよ？）

（……なんだ、アリアお前はなんだかんだ言つてやっぱりアレじゃ

ないのか？)

(…？アレ？…アレって何よ…)

(そーしそーあい)

「んなわけないじゃない！何言ってるのよ！スパインでアンタの体貫くわよ！！」

「うるせーよ！集中できねーだろー！！」

では改めまして……。

「行くぜ！俺！！」

レオンはエンチャントを開始しました。

ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！
！ドククン！

ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！
！ドククン！

ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！ドククン！

！ドックン！

レオンはエンチャントに失敗しました。
アイテムは消滅しました。

「んな！？なんで消えた！なんで消えたんだ！プロテクターは？！
！俺のブリスは？！！！！！！！！」

グレイスはそつとレオンに肩を置くと衝撃の一言を言った。

「プロテクターは受け渡しできないぞ？知らなかったのか？レオン
w w w w
」

んあああああああああ~~~~~~~~~！！！！！！

レオンは本気で挫折して号泣した。

こうしてレオンの夢は儚く散って行ったのである……。

Act・04：ああっ私のお姉さまっ！

「ちょっと！何してくれてんのよレオン！！！」

レオンはアジトの隅で冷や汗を掻いて、激怒するアリアの襲撃をなんとか回避していた。

「もう！これ大事にしたたのよ！どーしてくれるのよ！」

テーブルの上には壊れたヘアバンドがあった。可愛いヘアバンド。アリア愛用のヘアバンドであったがレオンによって破壊され、それを隠そうとしていたところをアリアが目撃してしまい現在に至ると言うわけだった。

「許さない！絶対に許さないんだから！覚悟しなさい！グレイス！メル！そいつを押さえといて！スパインで貫く！！！」

「了解」

「アイアイサー！」

二人は素直にレオンの腕を掴み上げ、身動きとれないようにした。
「ちょ？！お前ら！離せ！離せつってんだろ！はーなーせーよー！」
アリアは槍を構えて一閃に貫かんとしていた。

「おい、やめろよ……こっちくんバカー！！！」

レオンは泣き叫ぶ。

「ぎゃああああああああああああ！！！！」

ガッチャアアアアアアアアンンツツ！！！！

「なんで手離しちゃうのよ！二人とも！」

「巻き添えは喰らいたくない」

「いやーおいちゃんあんなの喰らったら溜まりもないYO」

「んなことよりアリア！お前力の加減ぐらいしろよ！この怪力！！どーすんだよこの窓！」

しかし、今度はレオンが憤怒していた。

「う、うるさいわね！！それはアンタが避けるからいけないのよ！」

「避けなかったら壊れてたのは何！？それはマイボディ！！」

レオンは窓ガラスの破片を拾うとため息をついた。

「はぁ……どうすんだよこれ……」

「直せばいいじゃない」

「そういう問題じゃねー！！」

レオンはアリアに飛びかからんとする勢いで激怒していると二人の間に誰かが割って入ってきた。……なんとも二人より頭一つ分背が低いような……？

「ちよつとあなた、お姉さまに気安く近づいてんじゃないわよ！このクソ虫！！」

二人のヒートアップした言い争いはどこへやら。レオンはアリアに視線を合わせながら見知らぬ少女に指差す。

誰？

しかし、アリアは首を縦には振らなかった。

知らない。

じゃあ、お前か？メル。

いんや？知らないよ？お宅らの隠し子じゃねえの？

いるか……こんな隠し子……！！

じゃあ、誰の知り合い？？

てか……。

「お姉さま」……？

三人は白けた顔でアリアを見つめる。

「ちょ……！何その微妙な顔……！私、本当に知らないったら……！」
アリアは全力で否定する。それではと今度はメルの方を見つめる。
「おっとー！ここで俺様かー！！だが、残念だぜ……。アタイは、
孤高の女戦士……なんだぜい」

メルはなぜかハードボイルドに台詞を決め込む。そんな様子をい
ざ知らずか見知らぬ少女はアリアに抱きついた。

「あーん、お姉さま……。私のことお忘れなんて……。あの日の事……
覚えておられないんですか？？」

あの日？……どういう事？

彼女の名前はミリー・ランバート。騎士に転職したばかりの騎士
見習いである。髪型をツインテールにする辺りがまだまだ子供っぽ
いあどけなさが残る。

それは忘れもしない……。私がまだ騎士に転職する前……。すなわち
戦士時代のお話……。

「え？ちょ……？！回想？回想シーン突入しちゃうの？！」

あれはまだ、私が戦士としても未熟だった頃のあの日、お姉さま
……。あなたが現れたの……。

私はその日、火山1でソロしていた時……。偶然遭遇してしまっ
たデスチャンプスミルに襲われ、絶体絶命のピンチの時だったわ……
……。

「きゃあああああああ……！来ないでー……！」

しかし、デスチャンプスミルは彼女を襲う。そんな時、現れた。
「てえええええやあああああ……！！！」

彼女の前に現れたのは一人の女性騎士だった。彼女は槍を巧みに
扱い、デスチャンプスミルは怯んだ。

「……ふう、大丈夫？」

そして彼女に手を差し伸べた。

「…は、はい」

この時彼女は運命を感じた。私、お姉さまの妹になるの!!

「おーう！トドメ貰ったZEEー!!」

まあ、そんな二人の世界の外野でメルが颯爽と現れてデスチャンプスミルを撃破していたのだが、ミリーの目にはもうアリアしか映っていなかったのである。

「……………」

三人は白けた顔でアリアを見つめた。

「あ、あれは困ってたから助けてあげただけよ！」

「お姉さま……それで私決意したんです！お姉さまのような立派な騎士になってお姉さまのように強くなると！そして……」

「そして……？」

お姉さまと二人きりのラブビューティーワールドを築かんと……

!!ああ、お姉さま……

「モテモテだね♪リアっち！にくいねこのこの〜」

「嫌！それは嫌!!」

お・ね・え・さ・ま・♪

「ひいひいっ!!」

ブバアッ!!

ミリーは鼻血を噴射。興奮しすぎた。

「え?! な、ええ?!!!」

「どうしても!?!お姉さま!!」

「どうしても!!」

アリアは断固拒否した。つまり、ミリーは。そう、彼女はそういう女の子なのだ。アリアは正直、これ以上もう関わりたくなかった。早くお取引願いたい。

「それならお姉さま……」

「な、何よ……?」

「私を……ミリーを……大人にしてください!」

「ええ?!」

「じゃなかったです……私をお姉さまの弟子にしてください!!お願いします!!」

まあ、つまりあれだ。そういうことだ。

アリア達はゾロゾロと師匠と弟子のサポーターのところまでやってきた。

「ちよつと、アンタ達なんで付いてきてんのよ」

「別に……ヒマだか……一応俺、ギルドマスターだからな!ギルメンのことを知っておかなきゃだ!」

「今、ヒマって言ったでしょ!」

「俺はヒマだったからな」

「リー、一人でお留守番は嫌だがん」

「あ、私はやつぱりーなんつーの?野次馬?」

……。まあ、いいや。

「じゃあ、これからアナタを私の弟子として登録するけど……本当に私なんかでいいの?」

「はい、お姉さま以外なんてありえません!!」

「そ、その呼び方やめてよ……」

「いいえ!お姉さまは私の『お姉さま』です!……!」

ミリーは瞳をキラキラと輝かせながら話す。これは何を言っても無駄だ。観念した方がいい。

そんな二人の様子を尻目にレオンはグレイスをつついた。

（なあ、グレイス）

（なんだレオン、どうした?）

（なんてーかさ、ぶつちゃけなんだかんだ言って今回で4話目だろ?今回は師匠と弟子のくだりでグダグダてか?）

（さあな、だが今回は違うだろう?そこまで俺達の作者はバカじゃ

ないだろうwww)

(けどなー……イマイチ信用ならねーよ)

レオンとグレイスは二人で会話しているとどうやらアリアはミリーを弟子として登録を終え、こちらに戻ってきた。

「終ったわよ」

「おう、おつかれ」

「じゃあ戻るか」

「リーお腹すいた」

アリアは振り返り、ミリーを見つめた。

「どうしたの？」

「あ、いえ！……その……」

ミリーはもじもじしながら深呼吸する。

「お姉さま……！その！……」

「ん？」

「……ふつつか者ですが……よろしくお願いしますー！」

「キタキタキターー！！まるで嫁にでも来る勢いー！！」

「ちょー！？な、何言ってるの？！やめてよ！そういうの！ってかそれおかしくない？！」

「いえ！合ってます！なんとわれようと私の決心は揺らぎません

！私は……私は……」

ブバァッ！！

ミリーは鼻血噴射でぶっ倒れた。アリアの弟子になれたおかげでちよつとここでは書けない表現が……。やっぱえ興奮しすぎだ……。

…。

「ちょ……ミリー？！」

レオンは白けながら言った。

「やっぱこれ、このくだりで終わりだろ？」

「……そうだなwww」

「リーお腹すいたー」

「いやー今日もなかなか面白い一日だったぜい」

後日。

「お姉さまん♪」

レオンはその様子を見てかなり引いていた。

「……もうそんなにくつつかないでよ！」

「ああん、お姉さまのい・け・ず・」

アリアは鳥肌が立った。……やっぱ関わるんじゃないかった……。そう後悔した。

アリアはベソを掻きながらレオンの方へと振り向いた。

「俺、そろそろ取引時刻だ。じゃ、行ってくる」

「いてらー」

そう言っただけでレオンは逃げ出した。……仕方なしに今度はグレイスの方へと向く。

「おっと、リリー。今日は新しいおもちゃを買ってあげる約束だったな？行くか？」

「うん、行くだっぺ♪」

グレイスはリリーを連れてアジトから出ていった。

最後にメルの方を振り向く。

「おうー、なんだ？私が恋しいのか？恋しいか！だが悪い……。私はこちらからなんと！」

「な、なんと？」

「ブルーベリータルトを食べにスオミに行くんさー！！そんじゃま、頑張れ二人とも。俺たちは応援してるぜ？」

メルは親指を立てて格好つけながらスオミゲートを使って飛んでいってしまった。なんとも無責任な……。

そして、二人きりになる……。

ミリーは願ってもないチャンスにさらに甘えてくる。……ああ、お姉さま…… 今日もお美しい……♪

アリアはひどく後悔した……。そして願った。どうかこの願い……
…叶えてほしい……。

助けてください（切実）

Act・05：ギルドとお姉さま

「……お姉さま！」

真剣なまなざしでミリーはアリアに訴えかけた。

「や、やめてよ……そのお姉さまって……」

「いいえ、やめません！……それよりも」

ミリーは意を決して言い放った。

「私をお姉さまと同じギルドに入れてくださいませませませ……！」
ませ多っ！

「……だって、どうする？レオン」

アリアはレオンの方へ振り向く。

「俺すごくね？あとこれを積み上げれば完成だぜ？」

「レオン、すごいだっぺー」

「たしかにこれはすごい……」

「さすがレオっち！地味な事はなんでもお任せって感じ？？」

なんかランプでピラミッド作ってるし。たしかにでもすごいな。

「俺行くぜ？行っちゃうぜ？」

ドキドキとした緊張感のなか、それはついに完成されようとしていた。

「何やってんのよアンタらわぁ……！」

アリアが叫ぶと作りかけのランプピラミッドは儚く散った。

「ああああああああああああ？……！」

以上、前フリでした。

「……何？お前……俺達のギルドに入りたいって？」

レオンはそう言つとキリツとミリーは言い放った。

「は？何言ってるの？私が入りたいギルドはお姉さまのいるギルドよ？アンタみたいなクソ虫のとこじゃないわよ。なに勘違いしてん

の？死ぬの？ねえアンタ死ぬの？バカみたいに死ねば？」

ミリーの容赦ない罵声にレオンは耐えきれず、横に座っていたアリアに泣きついてきた。

「……全く、あいかわらずメンタル弱いわねアンタは……」

アリアはため息をついてミリーに話す。

「ミリー、あのねえ……私が入ってるギルドって……」

「お姉さまと同じギルドならどこだって構いません！入れてください！」

「だからね……」

「きつとお姉さまが入っているギルドです！きつとお姉さまがギルドマスターで……いや絶対にギルドマスターで！とっても有名なギルドのはずです！いえ、はずではなく絶対です……！」

ミリーは何を思っただけそう確信しているのか分からない。

「……私、ただだけあなたに期待されてるの……？」

「さあ、お姉さま 私にお姉さまと同じギルドに入れてください！

……はあはあ」

なんかヤバイよこの人。

「……お、落ち着いてよ……あのねえ、私、ギルドマスターじゃないし、……有名なギルドにも入ってないわよ？」

衝撃だった。衝撃の一言。ミリーは落雷に打たれた気分だった。

「そ、そんな……。はっ！そうか！お姉さまは独立して新しくギルドを立ち上げて！そのギルドマスターなんだわ！そうに決まってる！間違いない……！」

「人の話を聞け……！」

アリアは何とかミリーを落ち着かせると、事情を全て話した。

「そ……そんな……ウソ……」

「ウソじゃないわよ。全部事実。……私はこの人、レオンの設立したギルドに入って、一応オフィサー扱いなの。そして、そこにいる二人は私達のギルメン。そしてここはアジト。……わかった？」

「ウソよ……そんな、ウソ……。ウソに決まってる！」

「人の話聞いちゃいないわね……」

「それはきつとりアっち一筋って事なんじゃねーすか??」

「や、やめてよメル……。そう言う事言うの……」

うん、たしかにメルの言う通り、なんかミリーが昼ドラで旦那の浮気を目撃したみたいない顔してるし。

「こ、こんなクサレ虫がギルドマスターなんて！世の中間違ってるわ……！」

「え？俺、虫？虫なの？」

ミリーはシヨックを隠せない。どうする。どうしたものか……。

こんな世の中絶対間違ってる！そうに決まってる！だって、レオン……、弱いし、メンタル弱いし、雑魚いし、地味だし、雑魚いし、卑屈だし、雑魚いし……。

「さつきから雑魚雑魚うつせーよ……！」

「と、とにかくそういう事なの。だから、ミリーがギルドに入りたいつて言っても……、マスターの指示に従わないと……。まあ、話を聞いていたからわかるでしょ？レオン」

レオンは腕を組んで黙り込んだ。しかし、ここで 그레이スが手を上げた。

「なんだ？ 그레이ス、なんか意見でもあるのか？」

「いや、別にそういうわけじゃないんだが……。彼女をギルドに入れる入れないの問題の前に一つ確認しなくてはならない事がある」

「ん？……ああ、そういえばそうだな」

ギルドに加入する前に忘れてはならない必要最低限の条件があった。それは、

「ミリー、お前今レベルいくつ？」

レオンに言われ、ミリーは固まった。

レ、……レベル……？しまったあ……忘れてたあ……！そう
だ、ギルドに入るには最低限のレベルがないと入れなかったっけ
……？

「あ、……えーと、……その……ねえ？」

ミリーの目が明らかに泳いでる。

「ねえ？じゃねーよ……。アリアが入ってるこのギルドは一応戦闘ギルドだ。レベル51以上ないとアリアと同じギルドに入れねーぞ？」

え？！戦闘ギルドオ……？そ、そう言えばみんなキャラIDの上のギルド名掲げてるう……！そつかあ……、そうだったあ……：戦闘に入るには51ないとダメなんだっけえ……。：

「で？お前のレベルは？」

ミリーは汗をダラダラ流しながらあさつての方向を向いて、口笛なんか吹き始めちゃった。

「あ！さてはお前レベル足りねーんだろ！そうなんだろ！？」

「ぴゅーひゅーふいーひー」

「なんだよその口笛！ちゃんと音鳴ってねーじゃねーか！てか、誤魔化すな！」

「う、うるさいわよこのドブ虫！」

「また虫？！もういいだろそれよおー！」

「つてえことは……つまり……ミリっちのレベル足りないからギルドに入れないって事にゆ？」

「う、うん……。そう……。けど！こんなことじゃ私とお姉さまを引き裂く事なんて出来ないわ！必ず！必ずレベル51にしてみせるんだからー！」

まあ、意気込むのはいいいけどね。

「けど、そもそもなんで戦闘ギルドなのよ！親睦ギルドでよかったじゃない！アンタ何したいの？！バカでしょ！死ねよ！早く死んじやえばいいのよ！そしてお姉さまを開放しなさい！！」

「い、いいだろおお！！だって格好いいじゃんかー！戦闘ギルド！名前が自動的に掲げられるんだぞおー！格好いいじゃんかー！！親睦ギルドなんて掲げられないんだぞ！地味じゃねーかよおー！！」

「地味すぎるアンタが地味を語る資格ないわ！！」

ミリーはそう言つとレオンはショックを受けた。たしかに地味だ。卑屈だ。しかし、まあ真つ正直に言ってくれちゃってありがとう。

「もついいわ！……私必ずレベル51になって見せるから！そしたら私はお姉さまとラブビューティーワンダフルワールドを築く！！」
「築かなくていい！！」

「いやー羨ましいねーミリっち、リアっちにZOKKONだね！！」
ミリーはそう言い残して走り去ってしまった。

「あ、ちよつとー！！」

しかし、もうミリーはいなかった。

「ねえ、レオン！いいの？あの子一人で行っちゃったわよ？！」

「……いいよ。あいつなら必ず戻って来るって言ってたじゃねーか」
「でも……」

「……知ってんだろ？お前だって……俺達がどうしてもこのギルドを作ったかを……」

「う、うん……」

「これぐらいの事で根を上げるんじゃ俺達の仲間にはなれねーよ。それに……」

「それに？」

「黙って見ててやるーじゃねーか。アイツの意地をよ……」

レオンの言葉にアリアはため息をついた。

「……わかった。そうする。リーダーのアンタの言う事だもんね。私は信じてるわ……。あの子はきつとやってくれるって」

レオンとアリアはそうしてミリーを見守ることにした。

「じゃあ、景気づけに氷でも行くとしようではないか、諸君」

「リー、行くぞー」

「おう？それなら俺っちも行くぜえい！」

グレイスはアドリブリンクを取り出した。

「あれ？今、結構いい感じに話まとまってただろ？！なんでいきなり狩りの話になってんだよ！」

「む？レオン、お前は行かないのか？」

「え?!」

行きたい。行きたいに決まってる!だから、

「行きたいに決まってるんだろ!今日こそ狙う!ストライダーブーツ!」

「ミリーを待つてるんじゃないの?!」

「えー……ただブーツ待つてるなんざ、俺の性分じゃねーんだよ。じゃあお前待つてるか?ここでボーっと」

「え?!」

何よもう!私だって……。

「行くわよ!行きたいに決まってるじゃない!」

「決まりだなwww」

「おっしやー!紅蓮の流星!これから氷に狩りしに行くぞああああああああ!!」

「「おおー!!」」

こうしてレオン達はアドリブリンクで氷へと飛んで行った。

そして翌日。

「レベル51になったわよ!!」

ミリーが戻ってきた。

「早っ?!え?早っ?!何て?!」

「だから、51になったって言ったじゃない。アンタの耳なに?虫でも詰まってるの?クソ虫」

「だから虫虫言っつなよ!……ってか、ええ?!もう51なの?!早くね!」

まあ、たしかに早すぎる。なんたって昨日の今日だぞ。

「それってやっぱりミリーっちのリアっちに対する愛の力って奴なんだぜ?あたしやーそう思うぜ?」

なんだそれ。

「単に、昨日50ヘルの後半だったとか言うオチじゃないのか?」
グレイスが横からボソリと言う。ああ、そういうことか……。

「なんでバラすのよ……」

「事実だろう？」

「……。ま、いいわ。これでレベル51だし！さっさと私をお姉さまと同じギルドに入れなさい！！」

この根性見上げたものだ……。アリアに対する執着心。すごすぎる……。

「……！わーったよ入れてやるよ。ただし、条件が一つある」
レオンはそう言うと言ったと真剣な顔で話す。

「……俺を馬鹿にすると俺泣いちゃうからな」

何を真剣に話すと思ったら……。そんなことか。

「お姉さまさえいたら、他は何もいらないわ」

二人は真剣な眼差しで見つめる事数分。

交渉成立。

こうしてギルド「紅蓮の流星」に新しくメンバーが加わった。

アリアというお姉さまにしか興味のないそっちの世界の住人、ミリー・ランバートが仲間に加わりました。

「え？！そんな肩書きいらなくね？！絶対いらないよ！！」

まあ、一応彼ら以外にもメンバーいるんだけど、まだ始まったばかりだしね。徐々に登場させようかな。

「それ、設定だよ？！そんなこと言っちゃダメじゃない？！作者のアンタならわかるでしょ！？わかるよね？！」

まあ、それすらもネタにしないと、不況の波に飲み込まれちゃうかなと。

「飲まれねーよ！ぜってー飲まれねーから！！」

まあ、次巻に続く

「勝手に終わらすなー！！」

Act・EX01：墓が突然現れるワケ

この日、レオン、グレイス、メル三人はイカルス火山フィールドにやって来ていた。

「いやー、まいっちんぐ」

『まいっちんぐ』……じゃねーよ!!』

「またか、またなのか？またなのだなレオン」

グレイスはやれやれとため息をつきながら一人嘆いていた。

『またと言っくんじゃねーよ!』

レオンはこの日、何度とも知れぬ死亡を経験していた。

「……………」

メルはレオンの死亡現場、レオンの墓を見て不思議に思っていた。

「む？どうしたのだメル。いつもうるさいぐらいのお前が突然黙り込んで」

「ん？あり？おいらってそんなにうるさいかい？」

『ああ、いつもうるさいなお前』

グレイスの意見に賛同するレオン。たしかに彼女はいつもハイテンションでノリノリでイベント事には毎度首を突っ込むのが当たり前。故にうるさい。しかし、そんな彼女がなぜかレオンの墓を見て黙り込んでいたのである。こりゃあ、明日は雨でも……いや、雪か？それとも槍でも降るか？

「槍は降らないと思うぜい？せめて砲丸にしとけよ」

そっちでもよかったのか？

「それよりもどうしたんだ？何かあったのか？」

グレイスの問いにメルは言うか言うまいか数秒悩んだ末、言う事にした。

「いやさあゝ、レオっちの墓見て気付いちゃったんだけど」

「ああ、それで？」

「HP0になつて死ぬじゃん？」

「そうだな」

それがRPGの掟だしね。

「普通ならその場に倒れるじゃん。なのになんでいきなり墓がそこに出来てんのかなと思っただけさ」

メルの素朴な疑問。しかし、それはいつもの光景であり、特に気にも留めていなかった。

「たしかに……一体どういう仕組みで戦闘不能になった時に墓が出現するのか気にはなるな」

「でしょ？俺っち気になって昼寝も出来ないZE」

『別にどういう仕組みだろうと気にならねえよ！！そんな事どうだっていいだろ！！』

レオンは叫ぶもグレイスとメルは腕を組んで考え込み始めてしまった。

「はて……む！ずばり！！」

メルは閃き、答えた。

「HP0になった瞬間！空から超光速で墓が飛来してくるんだYO！そうに決まってる！！」

「しかし、その場合地上に落下した時、落下した際の衝撃や暴風が舞い上がり、砂埃も発生しないか？それに第一、誰がどうやってこのような石の塊を持ち上げて投げるのだ？正確性にも欠ける。さらには落下した衝撃で墓は粉々になると思うが？」

物凄く現実的な答えが帰って来た。いやまあ、そうなんだろうけどねえ……。

「ふぬ〜やはりそうか〜」

『いや、いいよ！こういう仕組みだって！そんな事よりも蘇生してくれ！頼むから！！』

レオンは叫ぶ。するとグレイスがピクリと動く。

『お、グレイス蘇生してくれんのか？』

「やはり、こうではないか？HP0になり、戦闘不能になった瞬間……」

「瞬間？」

『もついいよ！考えんな！！そんな事は帰ってからいくらでも議論すればいいから！！』

「墓に变身だな」

「おお！！！」

『しねーよ！！なんで墓に变身しなきゃいけないんだよ！！する意味が分かんねー！！そんな事どうでもいいから蘇生してくれよ早く！！！！』

「いやでもさあそれってやっぱりおかしいZ E？」

「む？なぜだ？俺の考えに穴はないはずだが？」

「いやーさあ、戦闘不能で力もないのに、变身する力残してるじゃん？だったら復活しちゃった方が早くない？」

「……言われてみれば確かに……」

グレイスとメルはまたもや悩み込む。そんな時、またもやメルは閃いた。

「こういうのはどうだい？」

「む？」

「ほら、某RPGみたき墓の形した岩になるんだよ！」

「……いや、それは俺と同じ意見では？」

「チツチツチ！甘いぜ、甘すぎるぜ！！」

「甘いのか？」

「おう！ザラメより甘いぜ！！この考えでは三ターンの間有効だぜ？」

「な、なにいつ……！」

グレイスはショックを受けた。

『いやいやいや！なんだよターンって！！ターン制じゃないだろこのゲーム！！』

以前レオンは墓のままツツコミを入れる。そんな彼らの背後からモンスターが現れる。

「んおうっ！こいつぁー空気読まない奴だぜい！」

「たしかに、我らの邪魔はしないでもらおうか」

メルとグレイスに向かつて行く。

「おっとーグレイスの旦那あ！悪いがこのモンスターはアタイが頂くぜい！」

「む？！」

「一撃だぜえい！！どっせーいや！フレンジー！パワーアタック！！」

メルは高く舞い上がって、自慢の斧を空中から一刀両断するが如く振り下ろす。メルの攻撃は的確にモンスターを捉え、見事攻撃はクリーンヒット。さらに勢いが余ったかそのまま地面をもえぐった。メルは宣言通りモンスターを一撃で葬ったのである。

「相変わらず見事だな」

「いやいや、吾輩まだまだ序の口ですぜい？」

「それよりも先ほどの続きだが？」

『いや、続かなくていいよ！！いい加減俺を蘇生してくれ！！マジ早く！！墓がどうして出現するのは帰ってから議論しまくっていいから！！』

何やら声色が慌て過ぎ気味のレオン。一体どうしたと言うね？

「にやつはははははははいはいレオっちの言う通りにするよ。ちよつと待つて下さいな旦那」

メルは笑いながら自分の鞆の中を探る。

「はて、ここに来る前にちゃんと買つて来たんだけどさあ？あれ？どこだろ」

がさごそと鞆を探る。しかし、どこに入れたか？

『だあゝもう！肝心な所で役に立たねえな！！グレイス！蘇生魔法は！！？』

「む？レオン悪いが、俺は蘇生魔法覚えてないぞ？」

『なんで覚えてなんだよ！！聖職者だろ！！』

「ああ、たしかに俺は聖だ。けどな俺自身に役に立たない魔法なぞ、覚えても意味がない……。そう思わないか？」

グレイスはそんな台詞を吐き捨てた。なんか格好良くポーズを決めている……気がする。

『別に思わねえよ！！お前も肝心な所で』

台詞も中途半端にレオンの墓が消え失せた。ちょうどそのタイミングでメルはようやく蘇生アイテム、コマリクを見つける。

「おおゝあつたぜゝレオっちー。ってあり？」

「わずかに遅かったようだ」

「何々？ってこたあゝあれかい？時間切れかい？」

「どうやらそのようだな」

「いやあゝまいっちんぐダネゝ」

「うむ、だがしかし」

「おおー！やつぱり旦那もそう思うかい？消える墓の謎！」

どうやら新たな議題が出現したようです。もうそのままずっとやっつて下さい。

こうして墓が突然現れるワケは一向に解決される術もなく、結局の所謎は謎のまま終わってしまったようである。そしてもう一つの議題、墓が突然消えたワケ。それは、単に死亡してから30分の時間制限が過ぎてしまったため。いわゆるゲームシステムのひとつという事です。特別な謎は特にありません。

Act・EX02：紅蓮の流星の会計の底力

「またお前！無駄遣いしたのかよ！！アリア！！！」

レオンはアリアが帰って来るなり怒鳴っていた。

ここは紅蓮の流星のアジト。今日も今日とて平和な一日なのであるが……？

「何よ、別にいいじゃない。ほらこうしてリリーに被せると……ね？可愛いでしょ」

アリアは笑顔でリリーに被せたのはルナキャッツキャップ。可愛い猫さんの被り物である。

「にゃあーだつぺ」

「別によくねえよ！そもそもお前がいつも使ってる金は、全部俺らのギルドの金なんだぞ！それをなんでお前は目につくもの全て買うとするんだ？おかしいだろ！！」

「いいじゃない！どれもこれも気になるし！いつか使うかもしれないでしょ！！」

「じゃあその猫帽子はリリーのお土産として譲ってやるとしても、そっちのそれらはなんだよ！！」

レオンはそう言って指差す。その方向には何やら山積みになされたアイテムの数々。どれもこれも良い値段で売られているアイテム群であった。中には一度購入したら二度と手放す事が出来ないアイテムもあった。

「ふむ、これ女用エプロンだな……。こっちは、ティアレイドランスか……」

「これなんかすごい……さすがお姉さま。クルセイドガードにこっちはドラゴンスケールカイト……」

どれもこれもほとんど出回る事のないレアアイテム群。これら以外にもまだまだあった。

「いいから処分してこいよ！！」

「嫌！絶対に嫌！何と言おうと処分しないから！！」

まだ言い合いしている二人。そこへメルがペンとメモ帳を持って現れた。

「はいはいはい。そこの若人衆ちよいと邪魔なんだぜ？」

「む？どうした？」

「何か気配がないと思ったら一体どこから？というかそのペンとメモ帳は??」

メルはグレイスとミリーの間に割って入り、突然力リカリとメモをしたため始めた。

「ふむふむふむ。こいつあすごいねえ。どれもこれも値打ちもんだぜ？」

「たしかにどれもどから手が出るほどのレアアイテム揃いだな」

「お姉さま、素晴らしい……」

「いやまあ、そうなんだけどさあ。ふむ、こいつはいらん」

メルはアリアの購入してきたアイテムをなぜか仕分けし始めている。

「リリーちゃんよ、その帽子ちょっと貸してくんなまし」

「??」

リリーは首を傾げながら、被っていた猫帽子をメルに渡す。

「ほうほう……こいつはまた可愛いなあ。まあ、これはリリーへのおみやという事で勘弁してやろうじゃねえか」

メルはそのままかぼつとリリーの頭に被せ直し、再びブツブツと独り言を言いながら仕分け再開。

「メル、お前はいつもこういう事してるのか？」

「そうだけど、なして？これは使えるな。取っておこう」

「いや……俺自身、不思議に思っではいたのだ」

「何を？……っと、これはいらねえ」

「誰がこのギルドの会計を担当しているのか」

「あ、グレイスも思った？実言うと私も思ってたんだよねえ」

たしかにレオンとアリアの二人はどうにも、会計には向かないよ

うな気がする。かといってメルの隣にいるグレイスとミリーも会計しそつにもない。リリーはまだ子供だしね。

「会計担当、私なの知らなかったの？こいつは……微妙なところだぜ」

「うむ、今知った」

「同じく」

「だっぺ」

「まあ、こういうの地味だしのお。おっと、これはいらんぜ」

いつもハイテンションで周りを巻き込むほどのムードメーカーな彼女がこんな事をするという事自体、想像がつかない。

「ほれ、ちゃんとこうして明細書も取っておいてあるんだぜ？それとこつちが月々の家計簿。それとこつちは誰が何を購入したのかというメモ、ふむ……これはいるかな？」

それを見るなり、かなり細かくチェックされているのかわかる。

「うわぁ完璧な家計簿……」

「たしかにきちん和管理されているな……それにこれは預金もしているのか？」

「おうとも。何かあった時のためにちょちよいとな。やっぱり備えあれば憂いなし……って言うだろう？これはいらん」

「それにしても……」

「お姉さまの買ってきてる物って……」

さすがお姉さま一筋のミリーもこれには引いた。

「桁が飛びぬけてるな」

「そうだろう？リアっちってばよー、ああ見えて生粋のお嬢様だからねえ。金銭感覚ないんだぜ？」

そんな事を笑いながら話しているうちにメルの仕分けが完了していた。

「普通はこういう事あまりしないんだけど、リアっちの買ってきた物って結構ムラがあるし、レオっちの言う通り、目についた物アレコレ買ってきたやうなんだよね」

「それは困りものだな……」

「だからこうしてリアっちの買ってきた物だけは事業仕分けしてるんだぜ？」

使う物、使わない物の区別がはつきりと明確になっていた。どうやら、単なる賑やかし担当ではない……とても切れる会計担当、それが紅蓮の流星きつての女戦士メルクリア・リユートその人なのであった。

グレイスはふと疑問に思った。

「ところでメル」

「ん？なんだい？」

グレイスは処分品と書かれた箱に入っているアイテムの方を指を差す。

「こっちの残った処分されるアイテムはどうするのだ？」

「あーそれかー」

メルは言われると一言だけ答えた。

「それF2の売買掲示板に書いたり、露店に出して売るんだよ」

「ほほう、いいのか？どれもこれもレアアイテムばかりだぞ」

「まあそうだけどもー、これなんか使う事ある？ほれ、ディジェレイドキュレック」

「ふむ……。たしかに装備できる奴はいないな」

グレイスはディジェレイドキュレック以外の処分品を見るなり、どれもこれも誰も装備できなかったり、肝心な所で役に立ちそうなアイテムがなかった。これではいかに高額なレアアイテムであろうと宝の持ち腐れというやつである。

「だから、売りに出してギルドの資金源にしているのSA！」

メルはそういうとニコリと笑顔で答えた。

そして、その夜……。

「しっかしなあー、リアっちめ……。こんなにお金遣い荒いと資金

も底ついちゃうぜ……」

ギルメン達の知らない所で今日もメルは家計簿と戦いを挑んでいる。

あとがき

お初です。今回このお話を書きました「はるまりん」です。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

あとがきといわれてもですが……、何を書いたらいいか？ストーリーを書くよりも大変です。

そうですね。やはり、第1巻なのでまず最初に知ってもらいたい事でも書きます。それはずばり、この作品……。元は私自身が実際にプレイしているこのアスガルドの所属しているギルドのホームページの小説用掲示板に連載されているものをコチラに掲載しています。

ですが、ただ単に移すのは意味がないので差別化を図る事にしました。勿論、前もって連載されているものを誤字脱字修正は当たり前です。ここはやはり……アレしかないと思ひまして……。まあ、そういう理由で差別化しました。こちらで掲載されているものは当然連載されているものとは違います。もし気になる方がいましたらググってみてください。違いにすぐ気付くと思います。

さて、そんなこんなで今回の作品のアレコレ？を少しだけお話ししましたが、第2巻以降もこんな雰囲気です。そう、どうでもいいよ！な雰囲気です。

さてさてそれでは皆様、次回は第2巻でお会い致しましょう。それでは、また！

アスガルド 親睦ギルド『親睦っぽい』ホームページ H22年4月1日～4月5日分に掲載分の5話分をリメイクし収録。残り2話分書き下ろし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270m/>

アスガルド - 紅蓮の流星 - Vol.01

2010年10月8日10時32分発行